

弟の彼氏

hichakko

弟が恋をした。

私をはじめてそのことを知ったのは、クリスマスイブのこと。

密かに弟の白雪と二人でクリスマスを祝おうと思っていた私は、両親にはナイショでクリスマス仕様のショートケーキを二個だけ買って（家族全員分買ってたら私の財布が寂しいことになるから）、るんるん気分で行道である公園の中を歩いていた。

でるらしい、という噂の公園は、夜になるとすっかり人通りがなくなる。

本当は私もできる限り通りたくはなかったのだが、早く帰って弟と一緒にケーキを食べたいという気持ちの方が恐怖より勝っていた。

でませんように！ と心の中で祈りながらもはやる心は抑えられず、仲良くケーキを食べる麗しき私たち姉弟のことを考えていたら自然と笑みが浮かんできた。

きっとこんな顔を赤の他人が見たら、気味悪がられるに違いない。そう思いながらも、にやにやしてしまうのを止められず、私はすっかり浮足だっていた。

そんな私を突然冷静に引き戻したのは、噴水を過ぎたあたりだった。

がさり、と草を踏む音がして、私は度肝を抜かれた。

まさか自分以外の人間がそこに居るとは思わず、でた！？ と反射的に身構えてしまった私は、危うく買ったばかりのケーキの箱を落としてしまうところだった。

恐る恐る物音がした方の様子を窺うと、そこにはちゃんと足のある人間が二人居た。

やだーもう驚かさないでよーと内心ほっと胸を撫で下ろしながら、私は何事もなかったようにその場を立ち去ろうとしたのだが、ふと気になることがあって足を止めた。

.....あれ？　なんか見たことあるような顔が。

もし私の予感が正しければ、私が彼の姿を見間違ふことはまずありえない。

でも今日他の人間と居るなんて話は、聞いてないし.....。

いまいち確信が持てず、ヤキモキした私はそっと足音を忍ばせて近付いてみることにした。

——やっぱり白雪！？

公園にあるわずかな外灯の光で照らし出された弟の姿に、私は自分の勘が間違っていないこと悟った。端正に整った顔は際立って美しく（本当に私と同じ親から生まれたのかと思うほどに！）、神話に出てきそうな美少年っぷりに我が弟ながらクラリとくる。

その名の通り雪のように白い肌は、なぜだか今は少し紅潮していた。そして少女のように華奢な身体にそっと伸ばされた手。

え、手って誰の手？

ちょっと待って、一緒に居るのは一体誰！？

その時思わずはっと息を飲んで引き下がってしまったのは、二人の雰囲気少し妙だったからだ。

なんていうか、まず距離が近い。

まるで恋人同士のように寄り添っている二人は、無言でじっと見つめあっている。

見上げる弟、そしてそれを見下ろす弟よりも少し背の高い人影。

.....んんん？

なんかちょっと変な違和感があるのは私の気のせいかしら。

今時背の高い女の子は珍しくないし、特にヒールのある靴をはけば、隣を歩く彼氏の背をゆうに追い越してしまっているカップルを見ることもしばしばある。

だが、弟と親密(?)になっているらしい人影を見る限り、キャー！ とかワー！ とか思えないのはなぜだろう。

私最近ちょっと目が悪くなってきたかな、とか目頭を押さえたりなんかもして、改めてその人影を注視する。

あっれー、おっかしいなあ。どう見ても男に見えるんですけど。

女性らしい曲線のないボディラインといいますか。その人影を前にした弟の方が、よっぽど女の子みたいに見える。っていうか女の子以上に可愛いんだけどねうちの弟は！

変だ変だと思いながら、しばらく二人の様子から目を離さないでいると、それは突然起こった。

二人の影が、ゆっくりと近づいていく。

ひゃあっ！？ と奇妙な悲鳴を上げかけた私は自分の口を慌てて両手で押さえた。

でなければ次に起こった出来事に私は悲鳴ならぬ絶叫をあげていただろう。

そう、二人の影はひとつに繋がった。

ただ単に抱き締めたとかではなく、それはもうはっきりと唇と唇が...ってああもうこれ以上言わせな
いで！

ぎゃあああああっ！？ と心の中で大混乱しながら、私は慌てて回りを確認してしまう。

これ見られてないよね！？

誰にも見られてないよね！？

いや白雪と男のキスシーンもそうだけど、それを目撃してしまった私の姿とかもね！！

.....落ち着こう、落ち着こう私。

もしかしたらこれは目の錯覚かもしれない。ちょっと今の私は疲れてるような気がするから、
そのせいで幻覚かなんかを見ちゃったのかもしれない。

そう思って、大きく深呼吸をした後、私はもう一度弟たちを見上げた。

って、ええええええ！？ やっぱ現実！？ しかも現在進行形！？

ちょ、どんだけ濃厚なのよ——！？

あまりのいたたまれなさに見ている私がおのれにいられなくなって、そっと逃げ出すことに
した。

だってもう見てられないっていうかなんていうか、見なかったことにしたい。

私のめくるめく可愛い弟のメモリーが走馬灯のように駆け抜けていく中で、私は今見たものを
全て記憶から抹消することにした。

人間はあまりにショックの大きいことを目の当たりにすると、心の防衛本能からその記憶を忘
れるというけれど、まさにそうしよう。私は私の意志で、この出来事をなかったことにしよう。

私は何も見てない！ 男と白雪は何もしてない！ 白雪は私のもの！

と、あまりの衝撃にわけがわからないことを口走って全力で現実逃避していた私は、そこではた
と気付いた。自分の手からケーキの箱が消えていることを。

ああああああああっ！！

振り返ると、さっき私が居た場所に無惨に壊れたケーキの箱が。

そういえばさっき悲鳴を上げそうになった時に両手を使ったから、もしやその時に！？

そそそそそんな！？

弟が見知らぬ男とキスしてただけでなく、楽しみにしていたケーキまで失うことになるなんて
、今日はなんて最悪なクリスマスイブなんだ！

私は泣きそうになるのを必死にこらえて、こっそりケーキの残骸を回収すると、一目散に家へと逃げ帰った。

そして家に帰った後、私はぐちゃぐちゃになったケーキを一人寂しくむさぼり食べた。玄関で正座して、弟を待ちながら。

美味しくない。

一人で食べるケーキなんか、ぐちゃぐちゃになったケーキなんか、白雪と一緒に食べれないケーキなんか全然美味しくないー！

ぐすぐすと鼻をすすりながら私が二人分のケーキを食べ終わる頃、ようやく白雪は家に帰って来たのだった。

「ただいま、……って姉さんどうしたの!？」

すぐさま私のことを心配してくれるのは、まぎれもない私の可愛い弟で。

でもその顔が少し上気していること、その瞳がとろけるように熱っぽいことをこの私が気付かないわけがなく。

その瞬間、私は大きな絶望感を味わった。

弟は本当に恋をしてしまったのだ、と。

しかし、私の悪夢はまだ終わらなかった。

よもやこれ以上の出来事がクリスマスに起こるなんて、この時の私はまだ知らなかったのである。

12月25日、クリスマス。

もう18歳になってしまった私には当然サンタさんが来てくれた気配はなく、いつも通り——いや、個人的には最悪の朝を迎えていた。

昨日うっかり目撃してしまった、弟の秘密。

そのことを考えていたら、せっかくのクリスマスだというのにほとんど眠れなかったのだ。

しかしながら、今日は外せない予定が入っている。

私は寝不足で重い頭を抱えて布団を出た。

事件が起こったのは、私が今まさに家を出ようとしている時だった。

ちなみに弟の白雪とは顔を合わせていない。

というか合わせられなくて、私から避けてしまっていた。

だってどんな顔して白雪と会話すればいいのよ！？ 私の可愛い弟が男と……あああああ
ああ！！ 思い出したくもないっ！！

今だ脳裏に焼きついて離れない、私の頭痛の種となっているあの出来事。とりあえず、私の中で出した結論はこうだ。

相手のあの男を探し出して息の根を止めてやる！

そして文字通りなかったことにすればいいのだ。うん、そうしよう。

玄関でいそいそとブーツのチャックを上げていると、聞き慣れたチャイムが鳴った。

どうせ宅配便かなんかだろうと思っていた私は、印鑑片手に扉を開けた瞬間、固まった。

なっ…！ 騎士様！？

「騎士様」と言えば、うちの学校でその名を知らぬ女子は居ない。

「騎士」と書いて「ないと」と読む、ちょっとオシャレな名前をつけられた青年は、名前負けするどころかまんま乙女の憧れの的存在に成長してしまった成功例の一人だ。

かくゆう私もこの爽やかフェイスにどきゅんと一発ぶち抜かれた乙女の一人だったりもする。

……って言っても、いつも遠くから目の保養として眺めてるだけだけど。

まるで御伽噺の中から出てきた王子様であるかのような美しい容姿を持った騎士様は、少し戸惑った顔で私に微笑みかけた。

——何コレ夢！？

私はまず自分の妄想オチを疑った。

だってそうでしょ！？ 乙女たちのアイドルがなぜうちに！？ しかもよりにもよってなんで今私の目の前に！？

……あちゃー、こりゃ昨日の寝不足がたたったかな。

眠気覚ましに栄養剤でも飲んでこよ、と何事もなかったかのように、私は玄関の扉を閉める。握り締めていた印鑑をぽいと元の位置に戻し、ブーツのチャックに手をかけた時、なぜだかもう一度チャイムが鳴った。

いやいやいや、まさかそんな。ねえ。

今度こそ宅配のお兄さんに違いない、と自分に言い聞かせながら、私はそーっと扉を開けた。しかし、そこにはやっぱり騎士様が居て。

「……あの、ここ幸嶋さんのお宅ですよ？」

ぎゃあああ、喋った！？ 騎士様の幻覚が喋った！？

妄想は乙女の標準装備だけども、ここまでくるとリアル過ぎてなんだか怖い。

やっぱり今私が見ていると思っている現実、実は夢なんじゃないだろうか。

確か夢を見ている最中にこれは夢だということに気付くことが出来たら、夢の内容を操れるという話を聞いたことがある。

それならいっそついでに触ってしまおう。こんな機会、滅多にないし。

意を決して手を伸ばし、私があともう少しで触れるというところで、騎士様は突然予想外の言葉をのたまった。

白雪くんいらっしゃいますか、と。

え、白雪！？ 今この人白雪って言った！？

ちょっ、いつの間に白雪ってば騎士様とお近づきになってたのよ！ お姉ちゃんに紹介しなさいよ！！

と内心喜ぶ反面、ふと現実に戻って「ってかこの二人一体どーゆー関係？」なんて私が首をひねった時だった。

……ちょっと待って。

この人つい最近どっかで見た気がする。

いや、顔じゃなくて体型？ シルエット？ 人影？

ああああああああっ！？

お、お前は—————！？

間違いない。

昨夜、何度も何度も何度も何度も私の頭の中で反芻された、白雪のお相手である殺したいほど憎いあの男と体型が一致するのだ。

私と白雪はほとんど身長が変わらないから、頭一つ分高くって見上げなきゃいけないこの身長差とかもうバッチリだし！

騎士様は確かに私を含む乙女たちのアイドルだった。

でも、白雪の相手となれば、話は別で。

私にとって大切なもの、守らなければならないものの一番は無条件で白雪なのだ。

だから、私は——お姉ちゃんは、鬼になります！

「白雪は、今居ませんけど」

実際はさっき歯ア磨いてたけどね！

素知らぬ顔で冷たく言い放った私に、騎士は一瞬たじろいだようだった。

その瞬間を見逃さず、私は一気にまくしたてる。

「失礼ですが、私の可愛い弟とはどのようなご関係で？」

おっとうっかり自分で「可愛い弟」って言っちゃったたい。

「……友人、です」

「友人？」

はっ、と鼻を鳴らして私は笑う。

そんな嘘でとりつくるおうとはなんと愚かな男！

お前が私の可愛い弟目当てでここに来たことは分かってるんですからね！

私のこの曇りなきまなこを騙せるとするな！ 直々に門前払いにしてくれるわ！！

……うーん、我ながら昼ドラのヒロイン真っ青な小姑ぶりだ。いい感じにパンチきいてきた気がする。

「そんな話は私の大事な弟から一言も聞いたことはございません。どうぞお引き取りくだ——」

「姉さん！」

あともう少しというところで、突然白雪の声が割って入ってきた。

ちっ！ 気付かれたか！

盛大な舌打ちをした私を白雪は玄関の扉から無理矢理ひっぺがす。

それから白雪は騎士に向かって申し訳なさそうにぺこりと頭を下げた。

「すみません、先輩」

「あ、いや……」

「姉さん、なんですぐ俺を呼んでくれないんだ」

「ごめーん、白雪出掛けちゃったのかと思ってて」

てへ☆ なんて不二家のペコちゃんばりに舌を出して、可愛らしく誤魔化してみる。
くそう、あともう少しで追い返せたかもしれなかったのに。

我が弟ながらなんとタイミングのいい奴よ。

白雪は大きな溜め息を吐くと、騎士に向き直って言った。

「……姉が失礼なことしてしまってすみません」

「いや、俺は大丈夫だ」

「……良かった。それではどうぞおあがり下さい」

騎士の答えに白雪は心底ほっとしたように笑って、来客用のスリッパを取り出した。

そして、こともあろうに騎士を我が家へと招き入れようとしている。

はあああああっ！？

ちょっと待って、おあがりくださいィィィ！？

「ちょ！ ちょちょっ白雪！！」

私は慌てて白雪の肩を掴んで廊下の隅まで連れて行き、どういふことかと疑問の眼差しを向けた。

「なんであいつをうちにあげるの！？」

「なんでって、俺が呼んだから」

「はいっ！？ そんな話、私聞いてないわよ！？ 今はじめて聞いたわよ！？」

「だって、姉さんこれからどうせ出掛けるだろ。関係ないじゃないか」

そうですけども！ 今まさに出掛けようとしていたところですけども！！

そこで私はハッとした。

ま、ままさか……！

今、家には私と白雪と奴しか居ない。

↓

しかし、私はすぐに出掛ける。

↓

その後白雪と奴は二人きりに。

↓

結論：私の居ない間に二人はあんなことやこんなこと（以下略）。

さ、さ、させませーん！！

そんなこと、絶対、絶対、絶対させませ——んッ！

あまりの衝撃に、私が何も言えずに口をぱくぱくさせていると、その時がチャンスとばかりに白雪は私の体を玄関まで引っ張って行って、無理矢理外へと押し出した。

「じゃあ、行ってらっしゃい、姉さん」

にっこり笑ってガチャッとご丁寧に鍵まで締めてくれる。

私は完全に閉め出されてしまった。

もしかして……確信犯？ 確信犯なのか弟よ！ 最初から私が居ない間にあいつとイチャイチャする気だったのね！？

ぷちっと私の中で何かが切れる音がした。

許さん！

許さんぞ！

お姉ちゃんは……お姉ちゃんは……お姉ちゃんは、ずえったい許しません～～～～！！！！

私は慌ててポシェットから自分の携帯を取り出すと、神業的速さで今日会う約束をしていた相手の連絡先を呼び出した。

とにかく一分一秒を争う一大事なので、とりあえず「ちょっと遅れる、場合によっては行けないかも」的な内容を高速で打ち込み、メールを送信した。

そして肝心な時に携帯が鳴ることを避けるために、電源も切る。

ふう、と大きく息を吐き出し、私は自分の心を落ち着かせてから、まず庭に行った。そこで大きな脚立を見つけてにやりとほくそ笑む。

邪魔してやる。絶対邪魔してやる！

脚立をそっと二階ベランダへとかけると、バレないように一步一步のぼっていく。そして自分の部屋のベランダまでのぼり、開いていた窓からの侵入に成功する。

よし！ 窓の鍵かけ忘れてた過去の私、ありがとう！！

自分で自分にお礼を言い、私は早速隣の部屋(=弟の部屋)の様子をうかがうべく、壁に耳をつ

けた。

……………うむむむ。

何か話してるのは分かるんだけど、何を言ってるのかサッパリ分かん。

〜〜おのれえ、壁一枚の分際でえ…！！ こっちは弟の貞操がかかってるんだぞコンチクショー！！

仕方がないので、私は自分の部屋を静かに出ると、匍匐前進（気分的に）で弟の部屋へと向かった。

今度こそは！ と部屋の扉にぴとっと耳を押し付ける。

すると、今まさに何かを聞いた騎士に対して、白雪が「どうぞ」と答えたところだった。

どうぞ？ 何がどうぞなの！？

ま、まさか「キスしていいか？」の「どうぞ」！？

な、なんとハレンチな！ そういうことは口で聞くもんじゃありません！ 白雪も馬鹿真面目に答えるんじゃない！ 嫌だって否定しろー！

と、扉の前で頭を抱えて葛藤していると、誰かが立ち上がった気配がした。

え？ えっ？ ええっ？ 本気でする気！？

止めに入るところか逆に興味津々になってしまった私だったが、その気配が真っ直ぐ私の方に向かってきていることに気付いて、ハッとする。

やばっ！！

慌ててすぐそばにあったトイレの中に潜り込む。

そして便座の上に座って、ふうと安堵の息をもらした時だった。

——ガチャッとトイレのドアが開いたのは。

ドアを開けた人物と、便座の上で一息ついていた私の目が合う。

「——っ!？」

私は慌てて騎士の口を塞いで、トイレの中へと引っ張り込んだ。

それから、自分の唇の前に人差し指を一本立てると、シーッ!! と息を吐き出す音だけで静かにするよう強要する。

騎士はしばらく驚いたように目を見開いていたが、やがてもう大丈夫だと言わんばかり首を縦に振った。

私は騎士の口から手を離すと、すぐにトイレのドアを締めて、鍵をかける。どうやら白雪にはバレていないようだ。

「びびったー……」

小さく呟きながら、私はずるずるとその場に座り込む。

ちらりと見上げると、騎士が困ったようにこちらを見下ろしていた。

弟の彼氏。

私は弟とこの男が愛し合っているのを知っている。

本人たちはきっとバレていないつもりだろうが、私は彼らがキスしていた現場を偶然目撃してしまったことから、その秘密を知ってしまった。

そして今、私の目の前にその男が居る。

「悪いけど、あんたにうちの可愛い弟はあげないからね」

単刀直入に、私は言った。騎士は私の視線から逃れるように、視線をさまよわせる。

ええい、韓国ドラマに出てくるような爽やかフェイスで哀愁ただよう顔をするな!

「どういう……意味ですか」

あくまでしらばっくれるつもりか。ネタはあがってんだぞ、この野郎!

あの現場を目撃してしまった私のはかりしれない衝撃は、いまだこの胸に大きな傷として残っているんだからな!!

「もう隠さなくていいよ。私、知ってるんだから。あんたたちが、付き合ってること」

だあああ、認めたくないけど! 断じて認めたくないけども!!

私のその言葉に、騎士は大きくなだれた。

もう誤魔化せないと悟ったのだろう、額を覆う前髪に右手を突っ込み、ぐしゃっと潰す。

「……いつから、気付いてたんですか」

「昨日、あんたたちが一緒に居るのを見た」

「……………」

騎士はなんとも言えない微妙な表情を浮かべた。

あえて「どこまで」見たのか私は言わなかったけど、ただ一緒に居るだけじゃ付き合ってることにまで確証が持てるはずがないから、薄々感づいてはいるだろう。

「悪いけど、うちの弟のことは諦めてくんない？」

「——無理です」

はっきりと、騎士は断った。

その断固たる態度に、私はカッとなる。

「どうして!？」

「好きだからです」

「好きって……あんたたち男同士でしょうがー!？」

そうじゃなかった私だって認め……なかっただろうな。たとえ相手が女でも。

「俺だってどうにか諦めようと思いました。たとえ諦められなくても、絶対にこの気持ちは言うまいと。でも……」

「両想いだったって言いたいのか？」

「そうです。白雪に好きだと言われて、俺は拒めなかった」

そ、そんな……。

よりもよって白雪から告白したですってえ！？

ちょっ、そんなこと言われたらお姉ちゃんどうすればいいの！

くそっ、この男め～～！ 私の白雪に告白されるなんて、なんて妬まし…じゃない、罪深い奴！！

「私は認めないからね！ たとえ白雪があんたを本気で愛してたとしても、私は認めないんだからね！」

ああ、自分で言っていて悲しくなる。イヤー、私の白雪が男を愛してるなんてー！

「絶対に、絶対に、絶対に認めないんだから！ だって白雪は私の……私の——」

「——ただの弟でしょう？」

低い声が、私の言葉を遮る。

ふと顔を上げると、騎士が私を冷たく見下ろしていた。

負けた、気分だった。

そう、白雪は私のただの弟。

彼が誰を好きになろうと私に口を出す権利はない。

だって彼にとっても私はただの姉だから。

私は、悔しいだけ。

ずっと一緒だった弟が、違う人間に奪われていくことが、たまらなく悔しいだけ。

お気に入りのおもちゃを取り上げられた子どもみたいに、だだをこねてるだけなんだ。

「……すみません、言い過ぎました」

なぜか突然騎士が神妙に謝ってきて、私はハッとした。

いつの間にか自分の目から涙がこぼれている。

なっ、ちょっ、なんで私泣いてんの！？ しかもここトイレだし！！

さらに間の悪いことに、外からトイレのドアをノックする音が響く。

「先輩、大丈夫ですか？」

しまったあああ！ 長居し過ぎた！！

先輩、トイレ長過ぎだよ！ 白雪じゃなくても心配するよ！

私があわあわしていると、騎士が不意にトイレの蛇口を捻った。

そしてさっき私がしたように人指し指を一本立てて、静かにするように促す。

「大丈夫だ」

外に居る白雪にそう答えて、私をドアの死角に隠すと、最後に一言だけ呟く。

「あなたに恋人が出来た時も、白雪は同じように泣いていましたよ」

「……………」

そして彼は何事もなかったように、出ていく。用足してないのに。

トイレに一人残された私は、しばらくしてからぐいっと涙をぬぐって外へ出た。

悔しいけど、本当に悔しいけど、あいつは悪い奴じゃない。

きっと私の可愛い弟を大事にしてくれるはずだ。もしそうじゃなかったら、私が殺しにいつてやる！

まるで我が子を嫁に出す父親の気分で、私はまた溢れだしてきそうになる涙をぐっところらえた。

私は泥棒顔負けで家に侵入した時と同じように、そっと家の外へ出た。
そして、電源を切っていた携帯を取り出し、先程メールを送った相手の番号を呼び出す。
呼び出し音がワンコール鳴った後、すぐに繋がった。
えらい早いなと思いつつ、「もしもし？ 今どこ？」と話しかけると、少し間があった後、不機嫌な低い声が答えた。

『——目の前』

え、と驚いて顔を上げたら、いつの間にやらそこには馴染みの顔の青年が立っていて。
あまりのタイミングの良さに、私はちょっと泣きそうになった。

「いつから……っていうかなんで!？」

私が心底驚いていると、彼は無言で自分の携帯を差し出した。
画面に出されているのは、つい数十分前に送った私のメール。

漢字なし！ 句読点なし！ 挙句に誤字だらけ！

……うわあ、我がならずごく切羽詰まってるわあ。

しかも電源まで切っちゃってたわけだから、そりゃ送られた方は心配するよね。

「す、すみません」

素直に私が謝罪の言葉を口にすると、信じられないものでも見るかのような顔をされた。
え、何その顔！ ちょっと失礼じゃない!？

「アリス」

その時、ぽんと私の頭の上に手を乗せられて。

自分の名前を呼ばれた瞬間、私はふっと身体の力が抜けていくのを感じた。

無理なくていいから、と。そう言われたような気がして。

私のことなら何でもお見通しっていう態度がちょっと気に食わないけれど、今はそれ以上何も聞かないでいてくれるのがありがたかった。

そのまま私は彼の胸にぽすっと額を押し付ける。私が選んだ物分りにいい男は、そっと私の肩に手を回してくれた。

その途端、今まで必死こらえていたものが全部こぼれ落ちてくる。

割り切らなきゃいけないってことは頭では分かってる。でもやっぱり苦しくて。悲しくて。寂しくて。

——でも。

騎士が最後に言った一言を思い出して、私は嗚咽を飲み込んだ。

白雪が先に認めてくれたんだから、私も認めるしかないじゃん？

私が選んだひとを白雪が認めたように、白雪が選んだひとを、さ。

だって、私はお姉ちゃんなんだから。